

資料 農業・農村体験タイプ別活動例

1. フィールド型の活動例

■田畑等の自然に親しむ活動

- ・ 田畑周辺の植物・昆虫を観察
- ・ 田畑を使ったどろんこ遊び
- ・ 田畑周辺での食事、田畑でのキャンプ

■田畑等で農産物を栽培する活動

- ・ 水稻を育てる
- ・ 路地野菜を育てる
- ・ 果樹、花卉、園芸作物（ハウス等）の栽培

■田畑等のフィールドを自ら作る活動

- ・ 学校で自分たちの田畑をつくる
- ・ ビオトープづくり、堆肥づくり
- ・ 小屋づくり、庭づくり

〔実践例〕

農家といっしょに米づくり

米づくりの農業体験。モチ米や古代米の栽培、アイガモ農法など、取り組み方はいろいろある。JAが提供・推進している「バケツ稲」もすっかり定着。これを契機に田んぼで米づくりを始めた学校も多い。稔るまでに“八十八”の手間をかけるという“米”。だから、伝えること、学ぶこともぎっしり。農家に教わり、上級生に習い、子どもたちは稲の成長とともに育っている。



- ◆大分県のJA大分のぞみ女性部さがのせき支部と佐賀県町立大志生木小学校は、連携して稲作を実施。年間を通じた学校行事として、全校児童が参加。赤米づくりで米の改良の歴史にもふれる。

山に木を植える

地図を見れば、日本は山ばかりなのがわかる。炭焼き、きのこの原木栽培、紙漉き、養蚕などの体験では、山里の暮らしにふれられる。森に入って植林を手伝うのも貴重な体験となる。里山や森林の再生システムを知ることは、人間と自然の共生を考える際にも重要だ。子どもたちが公園で拾ったどんぐりを発芽させ、山に植えるといったかたちで、都市と農村の交流も企画できる。



- ◆岩手県の室根村立釘子小学校は、地域ぐるみの村づくりに取り組む。毎年、地元の漁民グループ主催の「森は海の恋人植樹祭」にも児童が参加、山と水の関係を学びながらブナやトチなどの広葉樹を植える。

2. ものづくり型の活動例

■保存食・加工食づくり

- ・保存食づくり（豆腐、味噌、漬け物、ジャム等）
- ・パンづくり、もちつき、そば打ち、ポップコーンづくり、地域の特産品づくり

■自然を生かした伝統食・創作料理

- ・地域に伝わる行事食や伝統食づくり
- ・農家に伝わる家庭の味、創作料理づくり

■生活の道具づくり

- ・かいこから糸づくり・綿花から綿づくり
- ・わらじづくり・しめ縄づくり、炭焼き、かまどづくり

〔実践例〕

梅が梅干しになる

作物を育て加工する体験も面白いもの。大豆を味噌にしたり、りんごをジュースにしたり、梅を梅干しにしたり、食品加工のメニューはいろいろある。試食会の開催、加工施設の見学、消費者へのPR活動参加などもセットできる。育てる過程に参加した子どもたちは、加工体験で“食”への興味を広げていく。地域特産加工事業に目を向ければ、バリエーションはさらに増えそうだ。



- ◆和歌山県のJA紀南青年部は、地元の上秋津小学校を対象に梅とみかんで農業体験を提供。子どもたちは、梅の着花数調査や剪定、収穫や梅干しづくり、みかんの摘果や収穫などを体験する。

郷土料理に大満足

農業・農村体験で、子どもたちは多方面から“食”を学ぶ。学習機会はいろいろあるが、食べるのが一番。なかでも郷土料理づくりは最適の教材となる。地域文化を知る契機にもなる。自分たちで育てた野菜や米なら、おいしさは格別だ。大根、レンコン、ラッキョウ、ソバ、茶など地域の特産物を育て、これを食材に料理をつくるという試みも各地にある。



- ◆福岡県のJA福岡県女性協議会では、都会の小学生を対象に「農村ファームステイ」を実施。伝統料理の“万十”づくりや収穫した野菜を使っただんご汁試食も、大切な体験プログラムとなっている。

わらじづくりに挑戦

農村は本来、循環型社会。食料の米をとった後の稲藁は、家畜小屋に敷いたり、灰にして肥料にしたり、縄やかごなど生活用具の材料にしたり、さまざまに利用した。各地にある藁細工は、生活者の知恵と技術のたまものだ。特にわらじやぞうりなど足回りの用具は、柔らかく加工しやすいという特長を活かしたもの。子どもたちには慣れない手仕事だが、物づくりの喜びを味わえる。



- ◆石川県の小松市立荒屋小学校は、JA小松市の指導で米づくりやその素材を活かした活動に取り組む。冬場には「町の先生」（お年寄り）から縄ないや藁細工づくりを習い、子どもたちは稲作農事の一年を体験する。

3. ふれあい交流型の活動例

■農家の生活を体験

- ・早朝の搾乳体験・畦で食べる昼ごはん
- ・農家に泊まる、農家の暮らしにふれる、大人数で囲む農家の食卓体験

■販売・出荷体験

- ・出荷場や直売所へ出荷体験 ・収穫祭や直売所等での販売体験

■動物の世話

- ・鶏の世話（えさやり、糞のそうじ、卵とり等）
- ・羊、山羊、ぶた等の世話、アイガモによる米づくり

■交流会・収穫祭等

- ・収穫祭、交流会 ・地域支援者への体験報告会

〔実践例〕

農家に泊まって農村体験

従来型の林間学校や修学旅行に代えて、農村を訪れる学校が増えている。これは、子どもたちが数日間農家に分宿して、その家の農作業を体験するもの。事前に体験の目的などを学んだり、自己紹介文を送ったりする。家族の一員として過ごす農村には、初めての経験と感動がいっぱい。登山やカヌーなど、自然体験活動を盛り込む場合も多い。



- ◆東京都武蔵野市の小中学校では、授業に位置づけて「セカンドスクール」を実施。子どもたちは、山形県、長野県、富山県などの農村に約1週間滞在、農業や自然を丸ごと体験する。（写真は第四中学校）

動物の飼育でいのちを知る

ヤギや豚などを校内で飼う学校、また、酪農体験を提供する牧場もある。動物とふれあうことで、子どもたちの感性は確実に育つ。農家の人の話を聞く機会を設けたり、畜産や酪農の学習を組み込むこともポイントとなる。いのちを育て、いのちの循環を知るきっかけとなる農業体験だ。



- ◆東京都の立川市立西砂小学校は、畜産農家から子豚を借りて育てて返す。子どもたちは休み時間や放課後、休日等に子豚の世話をする。給食残飯に炭粉や木酢駅を混ぜ、臭くない糞を堆肥にして花や野菜を育てることで、地球の循環型社会の良さを学ぶ。

売れるのって楽しい

収穫したお米や野菜をバザーや収穫祭で子どもたち自身が売ったり、JAの直売所や市場で販売する試みもある。物が売れるということには、つくるのとは別の達成感があるし、社会勉強にもなる。出荷の選別や市場への同行、消費者に向けたパンフレットやアンケート用はがきの作成などの活動を組み込み、流通のしくみや生産者と消費者の関係を知る機会を設けるところも多い。



- ◆秋田県の雄勝町立湯ノ岱小学校は学校農園で大根を栽培。地域の病院などで食べてもらっている。また、児童のメッセージを添え、JAこまちが東京の市場に出荷している。